

## 島崎藤村「三人」論

— 学都・松本と女子教育 —

栗原 悠

## 一、「三人」の評価とその問題

安政生まれの姉・高瀬そのをモデルとした「ある女の生涯」〔新潮〕第三五卷第一号、一九二一・七以降二年余り、島崎藤村は童話を除く創作の執筆から遠ざかっていた。それは、一つには一九二三年の正月に脳溢血によって静養を余儀なくされたからであるが、いま一つには自身の全集の収益を投じて主宰した婦人雑誌『処女地』の編集に傾注していたからであった。その後、再び書き始めた小説では一転して娘の柳子や姪のこま子など自分より若い世代の女性たちをモデルに描いている。就中、「三人」〔改造〕第六巻第四号、一九二四・四は、『処女地』に参加し、のちに結婚することとなる加藤静子と、松本の女学校に勤める加藤の二人の友人に取材した小説として『藤村パンフレット 第二輯』〔新潮社、一九二四・六〕の表題作にもなっている<sup>①</sup>。もっとも、藤村が加藤との関係を公にしたのは一九二八年に結婚をした時であり、「かくれたる内助者」と紹介された加藤の存在は「多年藤村氏と親交の間柄である馬場孤蝶、戸川秋骨、水上瀧太郎の諸氏ですらまだこの結婚を知らないでゐる<sup>②</sup>」と書かれたように、ごく一部の人間以外には認知されていなかった。従って、同時代にはそうした関係はテキストを読む前提にはなり得ず、「新潮合評会」での徳田秋聲の評言を借りれば、「処女地」の同人であつた一人の女のひと、その同窓で、今は田舎で先生をして、結婚期を過ぎた中年の女をモデルにして、その三人の旅先に於ける生活や気持を書いた小説として理解された<sup>③</sup>。その評価は必ずしも低くはなかつたものの、秋聲をはじめ、合

評会に参席した中村武羅夫、加能作次郎、宮島新三郎らは揃つて「ある女の生涯」と比べて登場する女性の内面が描かれていないことへの不満を述べている。同作を物差しとする評価は同時期のほかの小説についても見られる<sup>④</sup>。とりわけ「三人」の場合には文字通り三人の女性を登場させながら「どの女も実子「加藤がモデル」から見た女になつてゐて、実子から離れて他の女を見てゐない」<sup>⑤</sup>点が批判の中心となつており、相応の学識があるにもかかわらず、その内面の悩みが十全に描かれていないことが問題視された。同様の論点は中澤静雄の「三人の女性の心理の交錯は、おぼろげに窺はれながらも、そこにはつきりとした事象は掴めない」という評価にも共有されている<sup>⑥</sup>。

たしかに、当時の東京にあつては地方の女性教員の生活など知る由もなく、それがテキストに曖昧な形でしか描出されていないとの批判は少なくとも初出に対しては妥当な指摘であろう。しかし、ここでは中央文壇の男性評者たちの中立性は前提となつてしまつており、それがそのまま評価に繋がつていた。これに対して本稿は、「田舎」の「結婚期を過ぎた中年の女」という評言に象徴される彼らが内面化した価値観を対象化しつつ、武藤直治の言葉を借りれば、「知識あるめざめたるもの」が「無力なる自分を知」<sup>⑦</sup>らされたという「環境」の問題に焦点を当ててテキストの社会批評性を明らかにすることを目的とした。

そこで議論の補助線とするのが「三人」の舞台となつた都市・松本と女子教育の問題である。現在でも学都を謳う松本だが、のちにふれるように、二

Abstract

○年代においてはさまざまな教育観の係争地となっていた。松尾実子の友人、中川桃子と瓜生得子のそれぞれが勤めていた女学校もそのような松本市中にあったと設定されている。そこで、次節以降ではこうした背景に注意を払いつつ検討を進めていく。

## 二、「三人」における三人の境遇

一九二三年の六月一〇日から二四日にかけて、藤村は加藤静子を同伴して松本に旅行した。その目的は松本女子師範学校で講演を行うためであったが、冒頭に述べた年初めの脳溢血の療養も兼ねていた。「三人」がこの時に宿泊した山辺温泉（現在の美ヶ原温泉）での経験に取材していることは一九二四年二月一三日付の加藤宛の書簡で「昨年の旅を思出し山辺の土産を書いて見ました。それを書きあげましたらあなたからも百瀬さんや伊吹さんからもお叱りを受けるやうなものが出来上がりました」と書いている通りである。なお、ここで名前が挙げられた百瀬は江が得子の、伊吹信子が桃子のモデルとされているが、二人は女子英学塾時代の加藤の友人であり、当時はそれぞれ松本女子師範学校、松本高等女学校で教鞭を執っていた。

さて、そうした材料をもとに書かれた「三人」であったが、すでにふれたようにその内容は終始実子に内的焦点化した形で描かれ、得子と桃子については、会話を除いては実子の持つ情報の体で示される。また、右に述べた通り実際には藤村と加藤は一緒にいたにもかかわらず、テキストでは「東京の五味先生」「藤村がモデルとされている」を得子の学校へ迎へた時、講演後の先生をこの山辺の宿にも迎へて、その日は実子も得子や桃子と一緒に『おんばこ』の湯の方までお供をした」と、ほとんど別々に行動しているように書かれている。従って構成上は徳田秋聲の要約した通り、東京からやってきた実子が松本の女学校に勤める旧友と再会し、互いの現況について語り合う日々を描いた小説となっているのだが、「弱く生れついた婦人」実子にとつてこの旅行は飽くまでも「保養」であり、現地に到着して以降は五味先生の講演（得子の学校）と桃子の学校に付いて行く以外にほとんど出歩かない。また、「一週間はかり経つうちに、実子は一層桃子と親しくなつたばかりでな

く、同宿する得子にも馴染んで、（中略）寛いだ話が出来るやうになつた」と言いつつ、桃子は「姉らしい」得子を信頼しながら互いに「前途のことは何も語り合つて」おらず、この直後に実子も「生ひ立ちや趣味を超えて、もつと誠実を取りかはずことが出来たら、どんなに満足に、酬められることだらう」と考えるように、それぞれには踏み込めない領域が残されている。まずはこのような設定が前節でみた曖昧さへの批判の根拠となつていたと考えられる。

だが、語りによつて実子の回想や視線がどこに向けられているのかという記述に注意しつつ読むとまた違う点が見えてくる。予め述べるならば、実子の関心は地方都市で女子教育に携わる、教員としての友人たちにあつたとされている。それを支えていたのは桃子と得子が共に優秀な学生として実子に記憶されていたという次のような記述であろう。

学校時代から頭腦の好いので評判であつた瓜生さんに、眼の前の人を思ひ比べた。実子の眼の前には、かれこれもう三十の上を一つか二つも越した年頃の婦人が居た。東京の方に住む旧い卒業生仲間でも殊に瓜生さん最良なある夫人などから実子がよく噂を聞かされたのも、この人のことだ。（傍点・栗原、以下同）

桃子は何か思出したやうに、一枚の写真を机の抽斗から取出して、それを実子に見せた。それが桃子の一家だ。そこには学芸に志す人ばかりのやうな立派な家族があつた。年若で、しかも立派な成績ををさめ得た桃子の学生時代も尤だ、とうなづかせるものがあつた。

後者の記述は単行本時の加筆だが、とまれ、このような二人であるからには当然指導者としても活躍が期待されており、実子も二人をそのように見ていたと考えられる。しかし、「桃子は、国の親戚たちの勧めを拒みかねて、その夏かぎり松本を去ろうとして」おり、「得子は、もし適当な後任者さへ得られたら、この人も長くは今の学校に留まるまいと言つている」ように、

二人は学校を辞める意志を固めつつあった。無論、それぞれの決断は積極的なものではない。得子の場合はその理由を語っていないが、実子は彼女の部屋に置かれた「仏教に關した書物や經典」から「英語の畠から出た得子」が「詩——それでも物足らなく満たされ難いやうなものを宗教に求めて、日常刻々の刺戟にも燃えて行かうとするやうな、苦しい修道者の心」に向かつていることを読み取る。一方、桃子は両親から留学して勉学に打ち込むのであれば結婚するよう言われていると打ち明け、「結婚さへすればいゝなんて、そんなことがあるだらうか」と反発してみせる。注意したいのは、ここで突きつけられた結婚の問題は、一緒に雑誌を作った三木夏子を思い出し、「思ひ立つた仕事をあきらめて家庭の方へ入つて行つた」彼女に「他からは最も華やかに見える人が、最も深い悲みに逢つて居る」と同情する、実子にも共有可能であった。また、実子はその雑誌について桃子と得子の好評を得たと理解しており、そこに密かな矜持があつた。

兎も角も『何か為た』といふ心持だけは残つた。それは桃子も認めてくれたやうである。この友達が以前にも勝る親しみをもつて彼女を迎へて呉れるといふのも、あの得子まで一緒にこの山辺の宿で毎日食事をしやうといふほどの親切を見せて呉れるといふのも、そのためかと思はれた。

雑誌の編集に対する実子の認識からは、実子、桃子のみならず得子も女性の自立した活動に価値を置いていたと察せられる。実際、単行本収録時には削除されたが、初出時には得子の学校にも購読者が多かったこと、桃子がわざわざ出版社から月極で送つてもらうほど熱心な読者だったことまでが桃子の言葉として語られてもいる。雑誌が「十月ばかりで」終刊になったのは、実子が松本に来る半年ほど前であり、実際の『処女地』(全二〇号)の動静とほぼ一致しており、実子のいう雑誌が読者に『処女地』を想起させたであろうことは冒頭の徳田秋聲の評価にも窺えよう。こうした「三人」に対し、小林一郎は松本女子師範学校での講演を書き起こした「イブセンの『人形の家』

を読み、(大正十二年六月、松本女子師範学校講堂にて)『彰風会報』(第一六号、一九二四・七)において藤村がノラを「新しい女の代表的な型」とせず、「浮いた調子の婦人ではない」と述べている点に注目しつつ、藤村が発表直後に加藤にプロポーズした事実を強調している<sup>(1)</sup>。つまり、藤村の結婚への意志を読み込んだわけだが、テクストにおける過去に関する記述を見るに、桃子が五味先生の忘れていった巻煙草を手に取り、実子に対して「嘲の意味」で「新しい女」と戯れることを逆説的に結婚の肯定に繋げるのは、桃子らの屈折の意味を矮小化してしまわぬだろうか。また、五味先生がどのような講演を行なったのかはテクストに書き込まれていないものの、その日以降、実子は得子が涙を流している場面を繰り返し見たり聞いたりもしている。

このように、自身の療養のためにやってきたはずの実子は、優秀で将来を囑望された学友たちが現地の教員生活で思うようにならない状況にあることに次第に気付かされていく。しかし、前述の通り、東京からやってきた実子にはそのような苦境の理由が最後まではつきりとは見えていない。それでは桃子、得子が置かれていた松本の教育環境とはどのようなものだったのか。この点について節を改めて見ていきたい。

### 三、松本における自由教育の帰趨

藤村が生まれたのとほとんど同時期、当時の筑摩県参事(のちに権立)・永山盛輝は政府が学制を敷くよりも半年ほど早く「学校創立論告」(一八七二・三・三〇)※旧暦では二・二二を發布した。これに伴い、永山は松本藩藩主の菩提寺であつた全久院の跡地に筑摩県学を設置、学制施行後は開智学校と化した。筑摩県下でも初期の学校であつたが、永山は当校を拠点に教育の必要性を強く訴え、長野県に合併された一八七六年の同県の小学校学齢人員の就学率は全国一位となったほどの効果をあげている<sup>(2)</sup>。このように、長野県は明治初期から教育県として知られていたが、その中心地たる松本に自由教育が根付いたのは、開智学校に学んだ文部官僚・澤柳政太郎の存在が大きかった。今日、成城学園の創始者として知られる澤柳は従来、「私立学校の精神生命はその設立者の精神意見にあると思ふがそれのあるものは洵に少な

い<sup>13</sup>」と私立校の存在意義に懐疑的な立場にあった。しかし、京都帝国大学の総長職を辞して成城学園に赴いてからは一転して官立学校では実現の難しい個性を重んじた教育の普及に努めている。同様の動きは各地で勃興したが、澤柳の郷里・松本においてその役を担ったのが東西南北会である。

東西南北会は一九一一年に長野県内で手塚縫藏、岡村千馬太ら教員やジャーナリスト、医師その他実業家によつて県の教育を考えていく懇話会のような団体として生まれた。もともと、当初は名簿もなければ、会則・会費なども定められていないゆるやかな集まりであつたとされる。その名称は雑誌・『日本及日本人』の時事評論欄「東西南北」から取つており、このことから窺われるように会は急進的な欧化を批判し、日本固有の価値観を追求した杉浦重剛や三宅雪嶺らナショナルリストの思想に影響を受けていた。彼らの活動はこうした名士らを招いた講演会の主催に出発している<sup>15</sup>。この講演会について、会の中心であつた手塚は初めて三宅を呼んだ際に「説議を聞くのではない。人格にふれるのだ。詞文を慕ふのではない。高風を仰ぐのである」と述べており、名士の人格にふれることで在地の教育者たちの人格陶冶を促す目的があつたことが読み取れる。ただし、手塚は植村正久を尊敬するキリスト教徒として松本聖書研究会を主催していたし、他方で阿部次郎や安倍能成らの哲学叢書（岩波書店）を熱心に購読しているように西洋哲学やそれに影響を受けた同時代思想の動向にも強い関心を持つていた<sup>17</sup>。こうした傾向は手塚のみならず、会の後進たちにも見出せる。従つて、ここでの人格陶冶とは必ずしも政教社流のナショナルリズムだけによるのではなく、旧守的な価値観に束縛されない個性の伸長という点にこそ重きが置かれていたという点は強調しておきたい。

さて、このような東西南北会がその名を知られた契機が一九一四年に長野県師範学校校長の星菊太に対して排斥運動を起こした時であつた。彼らは星を文部省の内命により当時信州の教員たちに愛読されていたアンリ・ベルクソンやレフ・トルストイを敵視する官僚的な教育の徒として『長野新聞』などで批判の論陣を張つた。首謀者の一人、小松進の回顧によれば、「先生『星』は信州教育に理解なく、見識が低級で師範学校不適任と信ずるがゆえ、この

際他に転校するなり、退職<sup>18</sup>」せよということだつたという。手塚や岡村らリーダー格の教員は小松たち若手の急進的な態度に戸惑いもあり、また本件では糾弾された星も糾弾した教員たちも、また関与した教員の処分を決めた力石雄一郎県知事も更迭されて喧嘩両成敗の形となったが、とまれ、これ以降東西南北会は同志教員に働きかけ、県の教育を彼らの理念に沿うよう変革することを目指していった。たとえば、手塚の後輩で『白樺』の薫陶を受けた赤羽二郎による児童雑誌『小さい花』の刊行や、山本鼎の自由画教育などはこうした流れから派生した運動と言えよう<sup>19</sup>。

しかし、星の一件のように、自由教育の思想は文部省の方針とは対立するものであり、しばしば推進派教員には懲罰的な人事が行われた。一九一九年、赤羽は生徒たちに新しい書籍を購入するために勤務先（埴科郡戸倉小学校）の備品を売却したことを県議会で問題視され、結果的に退職まで追い込まれた。いわゆる戸倉事件である。県は赤羽のように雑誌『白樺』に傾倒して生徒の個性尊重を掲げる教員に対して「気分教育」のレッテルを貼り、戸倉事件の翌年には南安曇郡倭小学校、翌々年には上伊那郡中箕輪小学校などで退職処分を敢行し、勢力を削いでいった。また、こうした「気分教育」と結びついていたとされたのが、藤村が松本を訪れる前年の初めに下伊那で結成された自由青年連盟（Liberal Young League）であつた。LYLは南信の青年を集め、社会主義の勉強会を主催するなど基本的には穏健な活動にとどまっていたものの、関東大震災以降、全国的に左派思想への警戒感が高まっていたなかで治安に対する潜在的な危険因子Ⅱ赤化青年と見做され、県警は一九二四年三月一七日にメンバー一九人の一斉検挙に踏み切つた<sup>20</sup>。直前の二月二五日には上伊那郡上飯田小学校の校舎が火災で焼失したのを受けて白樺派の教師・小松宇太郎が取り調べの末、犯行を「自白」させられたが、本件に関して県当局は『南信新聞』紙上で小松を赤化思想に染まっていたとして一方的に糾弾した。半年ほどして小松は冤罪であつたことが証明されたが、和崎光太郎はこのように県側が自由教育と赤化とを意図的に結び付けてその危険性を喧伝したことを指摘している。また、和崎は東京高等師範学校教授・樋口長市を臨時視学に迎えての飯田小学校、松本女子師範学校附属小学校の視察

とそれに伴う教員の指導法への批判（共に一九二四年九月）を小松の件の延長線上に位置付け、一連の処分の目的を「当局から「赤化思想」の温床とみなされた「気分教育」の弾圧であった」とする。<sup>21</sup>特に後者は訓導・川井清一郎が国定教科書を用いず、「護持院ヶ原の敵討」（森鷗外）を題材に独自の修身の授業を行ない、樋口らに叱責され、結果的に懲戒免職に追い込まれた川井訓導事件として今日でも弾圧の象徴とされている。実際、川井擁護派による抗議の声もあつたものの、周辺への教育方針上の影響力が強い松本の女子師範学校を標的とした効果は大きく、県内の自由教育推進の機運は急速に萎んでいった。

以上のように、長野県下にて東西北会やその周辺の人々が牽引した自由教育は、少なくとも一九二〇年前後まではその勢いを保持していた。しかし、それは国および県の考える教育とは相反しており、その後は官選で送り込まれた保守派県知事らの圧力によつて勢いを失っていく。就中、川井訓導事件に代表される一九二四年に立て続けに行われた人事処分はその後の趨勢に対して決定的な意味を持った。一九二〇年代の松本は第一にそうした教育をめぐる対立に引き裂かれていたわけだが、次節ではこのような問題と関連して女子教育がどのように位置付けられていたのかを検討する。

#### 四、女子教育の受難

二〇世紀に入るまで長野県内の女性教員は男性教員に比べて少なく、また待遇に関しても差があつた。しかし、一九〇五年に長野県師範学校から松本女子師範学校が分離され、女子教育専門の場が整備されるなどするなかでその数は漸進的に増えていった。そうとは言え、彼女たちに対する保守的な価値観は容易には変わららず、一九一〇年代に入つてもしばらくの間、女性教員として男性に劣るといふ偏見が蔓延つていた。次に引くのは一九一七年当時諏訪郡視学であつた久保田俊彦（島木赤彦）が発表した「女及び女教員」である。

すべて女教員のみに限らず、女が家を外にして、独立したる職業を営むは

事甚だ自然にあらざ、打見たるにて凄まじき心地す。女教員の未婚者なるうちは猶見安し。既婚者乃至子育てる女が袴穿ちて路上を歩めるは何の現象ぞやと思はる。この事予一人の情の偏れるにあらず。大抵の人皆爾か思へり。万人の皆爾か思ふは、自ら人間自然の本性に根ざせるなり。<sup>22</sup>

久保田自身は自由教育の担い手ではなかつたが、早くから東西北会の手塚や岡村とも親しく付き合つており、そのような人物ですらこれほど頑迷な態度をとつていたことは当時の信州における女子教育への理解のなさを想像させるに足るだろう。

こうした状況を変えたのは前節の冒頭にも取り上げた澤柳政太郎であつた。一九一三年に日本で最初に女子三名を正規学生として受け入れたのが東北帝国大学であつたことはよく知られているが、澤柳は当時総長を退いていたものの、在職時に男子しか入学できないという規定がない以上、女子も受験に合格すれば入学出来るはずだと主張し、女子学生の大学進学への道筋をつけた。<sup>23</sup>かように女子教育に対して先進的な立場を採つた澤柳を会長に迎えたのが帝国教育会である。<sup>24</sup>澤柳は会長に就くや早速全国の小学校における女性教員問題を調査するため、全国の教育関係者から意見を聴取し、統計をまとめて一九一六年八月の『帝国教育』（第四〇九号）に発表する。<sup>25</sup>さらに翌年にはこの結果を踏まえ、全国女教員大会の開催を決定し、各県教育会に通知した。これを受けて、長野県はまず各郡で女教育会を開催してそれぞれの代表を決定し、九月に松本女子師範学校附属小学校の講堂で県大会を開いた。この結果、県大会と続く全国大会では女性教員の抱える諸問題が提議され、教員たちに共有された。一連の大会が「女性の大会」といながらも、男性によつて組織され、男性によつて進行<sup>26</sup>されたという指摘は否定し難いが、これを契機として県内でもさまざまな女権論が論じられる素地が整つていった。また、既存の教育観への反発から発展していった自由教育がそうした思想の受け皿になつたことは言うまでもない。「三人」において物語の現在時を一九二三年とするならば、「もう三年ばかりもこの土地に女学校の教師を

して居る」という桃子が松本に赴任したのは一九二〇年前後ということになり、まさにこうした機運が盛り上がりを見せていた時期であった。<sup>(27)</sup>

しかし、前節にふれたように、自由教育への圧力は一九二〇年代に入ってから次第に強まっていき、一九二四年九月の川井訓導事件に至るわけであるが、本節で強調しておきたいのは川井清一郎が叱責された原因が彼の修身の授業であったという点である。規範的な徳育を教える科目としての修身は、自由教育と国の教育の衝突点であったため、川井に限らず自身の裁量による授業を行う教員が多かった。たとえば東西南北会を中心であった手塚縫藏は折から既存の修身無用論を主張していたし、白樺派のうちには国定教科書に掲載されていないレフ・トルストイやオーギュスト・ロダンなど自ら選んだ文章を教材にして授業をする教員も多くいた。<sup>(28)</sup> してみれば、自由教育への逆風は必然的に修身の復権をも意味していたはずだ。<sup>(29)</sup> それでは、当時の修身はどのような女性観を良しとしたのだろうか。

小山静子によれば、端的にそれは従前の良妻賢母論に性別ごとに適当な職分があるとするジェンダー・ロール的視点を加え、女性を国民統合へとより強く導こうとするものであった。<sup>(30)</sup> 無論、学校教育の現場に限らず、一九二〇年前後には他国の動向を受けて女性の参政権や職業、性差を踏まえた男女平等の問題などが日本においても積極的に議論されるようになっていた。修身にもそうした影響はある程度認められるにせよ、根幹の規範は揺るがない。実際、小山の議論に立脚して各修身教科書の女性観を分析した姜華は、数多くの修身教科書を編んできた井上哲次郎の『女子修身教科書』（全三巻、金港堂、一九二五）に「男女の人間の価値の同一性を主張した点」を認めつつ、「性別役割論に基づいて女性の家庭内役割を強調していた点も明治期の修身教科書と基本的な変わりはなく、保守的色彩の濃い」ものだったとしている。<sup>(31)</sup> あるいはいち早く女子教育の重要性を説いていた澤柳にあっててもかような価値観から自由ではなかった。姜はまた澤柳（改訂女子修身訓）全五巻、同文館、一九二四）についても「女性の職業や参政権を一定程度容認する記述も見られるが、しかし、あくまでも男性の補助的なもの」だとし、「家族主義に基づく性別役割論を基本としつつ、時代状況に合わせて微調整した」に過ぎない

と手厳しい評価を与えている。<sup>(32)</sup> それは進歩的な立場の言論人の目にどう映ったのだろうか。『処女地』で加藤静子が紹介に努めた女権論者のエレン・ケイの著書を多数邦訳している本間久雄は井上、澤柳に加え、文部省の修身教科書を読み、「以上列挙した教科書の教義とする婦徳、婦人処世訓等の根本に蟠まつてゐる消極的な、旧式な保守的な思想、及びその思想を根底とする教育方針こそは現代をして危険ならしめる最も大なる機縁の一つであると思はずには居られない」と論難した。<sup>(33)</sup>

このように、自由教育に対する揺り戻しとしての修身の復権は、旧来の良妻賢母論的な女性観を改めて強調するものと捉えられていた。久保田の「女が家を外にして独立したる職業を営む事は甚だ自然にあらず」という価値観はなお根強くあったのである。従って、一九二〇年代の信州松本で女性教員として女子教育に従事するのは、こうした思潮と直面し、かつその変化のただなかに身を置くことにほかならなかつたわけだが、最後に「三人」のテクストに戻って改めてこの問題を検討したい。

## 五、「三人」における女性たちの岐路

さて、前の二節で見てきたような松本と当地の教育の問題は「三人」のなかにおいてどのように表出していただろうか。そこで注目したいのが次に引く、桃子たちが偶然宿に居合わせた「以前の学校の語学の教師で、亜米利加生れの婦人」を見送りに出ている間の一場面である。

実子は独り桃子の部屋に残つて居て、友達の書棚などを見に行つた。書棚とは言つても、古い床の間に並んだ袋戸棚の上を清潔に取片付けて、日頃の心の糧とするやうな書物がそこに並べてある。あの友達は教育に関したるものを多く集めて置いたが、その中にまじつて、ケエベル博士の小品集、それから阿部さん、和辻さんなどの著書も見える。

実子の視線に捉えられるのは、桃子の慎ましい下宿部屋の片隅に彼女が「日頃の心の糧」としている書物群である。ここで注意したいのは、教育関

係のそれらと一緒に「ケエベル博士」、「阿部さん、和辻さんなど」の著書が並んでいる点だ。藤村の小説テクストについては同時代の著者がそのまま名前を出されるのもやや珍しいが、ここで列挙された「ケエベル博士」は言うまでもなく、東京帝国大学の教壇で哲学や美学を講じたラファエル・フォン・ケーベルであり、「阿部さん、和辻さん」はその薫陶を受けた阿部次郎、和辻哲郎である。「ケエベル博士の小品集」というのは、阿部が編集長を務めた岩波書店の雑誌『思潮』などに掲載した文章をまとめた『ケーベル博士小品集』（深田康算、久保勉「訳」、一九一九・六）や『ケーベル博士小品集 続』（久保勉「訳」、一九三三・二）などを指していると考えられる。そのケーベルが亡くなったのはまさに藤村が山辺温泉に逗留中の一九二三年六月一四日で、直後には『思想』（第三号、一九三三・八）に特集が組まれ、和辻をはじめ多くの教え子たちが追悼の言葉を寄せている。

さて、数は少ないながらも厳選されたこのような蔵書から、桃子は人格主義的な思想に関心を抱いていたことが想像されるだろう。ここでの人格主義とは阿部の「人格の成長と発展とを以て至上の価値となし、この第一義の価値との連関に於いて、他のあらゆる価値の意義と等級とを定めて行かうとするもの」という説明に象徴されるような思想であるが、それは第三節で見た東西南北会・手塚縫藏らの人格陶冶の教育方針と呼応しており、当の手塚自身が阿部の熱心な読者であったことも既に述べた通りである。また、東西南北会と関わりの深い松本教育会は一九二一年に和辻と安倍能成を講習会に招待しているなど松本にはそうした思想を進取する気風があった<sup>35</sup>。無論、このような背景はテクストのなかには描かれていない。しかし、実子を取り組む雑誌を支持しつつ、「ケエベル博士」、「阿部さん、和辻さんなどの著書」を愛読する桃子にはそうした松本の自由教育と間違いなく親和的であったはずだ<sup>36</sup>。だが、その人格主義も自由教育の趨勢と踵を接するように、一九二二年には竹内仁の「阿部次郎氏の人格主義を難ず」（『新潮』第三六卷第二号、一九二二・二）によって阿部の主張が指弾され、影響力を失っていった。相田隆太郎はその年末に「新人竹内仁氏出でて本誌『新潮』の二月号で、ブルジョア批評壇の大家阿部次郎氏の虎の巻たる人格主義の思想的論拠を、第四

新興階級の立場から根本的に論破するや、既に動搖の兆があつた文芸批評壇は益々急角度の回転に向ふ機運を示した」と総括している<sup>37</sup>。ここで注意したいのは、人格主義がブルジョワ思想として階級的な問題意識からまず批判された点である。そもそも一九二〇年前後からの女権意識の盛り上がりには、『解放』などが共産主義的な立場から一夫一妻の婚姻制度を批判する記事を掲載したことなども大きく影響しており、直接参照したかは別にしてもそうした議論が女性たちに結婚を相対化する視点をもたらし<sup>38</sup>。してみれば、かような思想対立がそこに期待を抱いていた人々を挟撃し、大いに失望させたことは容易に想像されよう。

さて、「三人」のテクストの議論に戻る。次の引用はやはり単行本で書き足された実子と彼女の横で「むつかしい感想集のやうなもの」を読んでいる桃子との対話の場面だが、ここには近時における桃子の読書への姿勢の変化が垣間見える。

桃子は本を読むでもなく、一つところをちつと見つめて居た。

『どうしたの。』

『その時その時の感興や教訓は与へられても、斯うしているく／＼読んで見たつて……』

と桃子は半分独語のやうに言つた。その意味は、自分の考へに統一を与へるやうな力になるものが無いといふにあるらしかつた。

桃子が読書に対して信頼を失いつつあるのは明らかだろう。実子が桃子の「日頃の心の糧」だと認識していたはずの読書がここではかくも悲観的に捉えられるようになっていた。

ところで、初出に対する同時代評価では「田舎で先生をして」いる「結婚期を過ぎた中年の女」たちの内面が曖昧な形でしか表出されていない点に批判が集まったことは最初に確認したが、右の部分を含めて本稿が引用してきた単行本時に加筆された記述からは、「学芸に志す人ばかりのやうな立派な家族」のなかで自身も優秀だった桃子が教員として松本に赴任し、周囲から

の結婚の圧力と同時に自分が読んできたものが「考へに統一を与へるやうな力」とならない無力感に苛まれていった姿が浮上してくる。

ここで再びこの改稿の問題にふれると、第二節冒頭に引いた加藤静子宛の書簡にあるように、まず初出の原稿は一九二四年の二月半ばには完成されていた。そこから単行本の刊行までは三ヶ月余であったが、この時期にいわゆる気分教育Ⅱ赤化青年批判の口火が切られ、本格的な弾圧が強まっていったこと、あるいは藤村とも個人的な親交のあった手塚や赤羽王郎の周辺環境の変化などを併せて考えるならば、右のような桃子の描写の充実はこうした一連の問題を内包していたのではないだろうか。実際、四月二一日付の加藤静子宛書簡では加藤に会話文などの修正意見を求めており、五月二四日付の新潮社・中根駒之助宛書簡では既に原稿受け渡しの準備Ⅱ脱稿が出来ていると述べていることを加味すれば、書き直しはこの約ひと月の間に行なわれたと推測され、ちょうど気分教育批判が始まった直後に当たる<sup>(39)</sup>。よしんば個別の問題が意識されていなかったにしても、一九二〇年代の松本では自由教育への引き締めやそれを支えてきた人格主義への階級論的な批判、あるいはこれと逆に良妻賢母観を推奨する修身の復権、それらが多重に当地の女性教員にのしかかっていたのであり、「三人」において桃子、得子が教員を諦めようとしていたのはかような環境のなかであった。してみれば、「渡米でもして、いつか勉強の途を立てるか、さもなかつたら早く家を持って」と桃子が家族から示された選択肢のうち、前者が最初から諦められている点は看過されるべきではないだろう。アメリカでは一九二〇年前後からヘレン・パーカーズトによって理論化されたドルトン（ドルトン）・プランによる生徒個人の自主性を重んじた教育法が一部学校で実践され、日本からも澤柳政太郎らが視察に訪れており、一九二二年には成城小学校で試験的に取り入れられてもいた。こうした新教育の実験場としてのアメリカへ勉強に行くことを早々に断念した点は意識されず、実子が反応し得たのは、桃子が専ら結婚を当座の問題だと述べている点だったのである。そのような実子の視差にこそ、問題が伏在していたのではないか。

以上をまとめると、「三人」の初出から単行本への改稿はそれほど多くな

いものの、主に桃子の周辺情報の加筆に集中した。これによって桃子、得子が松本で女性教員として暮らす困難さが強調されたのだが、この改稿によってもその土地固有の教育観の問題は理解されることなく、大多数の読者は引き続き東京からやって来た実子の内的焦点化によって「結婚期を過ぎた中年の女」たちという点のみを読み取った。別言すれば、「三人」の改稿にはそのような都市と地方の情報差とそこから生じるそれぞれの女性たちの分断自体が構造化されていた<sup>(40)</sup>。この直後には川井訓導事件などが起こり、松本の自由教育の機運が潰えた<sup>(41)</sup>ことは繰り返し述べてきた通りであり、それは程なくして全国にも波及していくことになるが、かねてから地方や女性の教育の問題に強い関心を持っていた藤村がそうした問題をいち早く描出したのが「三人」というテクストであった。

#### 注

- (1) 初出『改造』掲載時から「藤村パンフレット 第二輯」の間には主として桃子の情報に関しての加筆（一部削除）があるが、本稿ではその部分の記述の差異に注目するため、引用は原則として後者に拠る。その際、旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。
- (2) 「島崎藤村氏、突如の結婚 門弟加藤しづ女と親友も知らぬ間の婚礼」『東京朝日新聞』（朝刊、一九二八・一一・一六）。
- (3) 久米正雄、徳田秋聲、加能作次郎、宮島新三郎、菊池寛、中村武羅夫「新潮合評 会 第十三回（四月の創作）」（『新潮』第四〇巻第五号、一九二四・五、七二頁）。
- (4) 田山花袋、芥川龍之介、久米正雄、宇野浩二、加能作次郎、千葉亀雄、久保田万太郎、中村武羅夫「新潮合評会 第二十一回（二月の創作）」（『新潮』第四二巻第二号、一九二五・二）での「伸び支度」（『新潮』第四〇巻第一号、一九二五・一）評価など。
- (5) 前掲注(3)、七三頁。同様の批判は藤村と加藤の関係を理解していた平野謙も踏襲しており、「三人」における作者の感情移入が、「ある女の生涯」におけるそれにくらべて、まだまだ深切ではなかった」と述べている（『解説』『嵐・ある女の生涯』新潮文庫、一九六九・二、二八〇頁）。
- (6) 中澤静雄「四月の創作評」（『早稲田文学』第二九号、一九二四・五、一一五頁）。
- (7) 武藤直治「第三章『新生』より『嵐』へ 現実主義の新展開」（『藤村の作品と鑑賞』弘文社、一九四九・二、一一二頁）。
- (8) 一九二四年二月二三日付・加藤静子宛書簡（『藤村全集 第一七巻』筑摩書房、一



九六八・一一、三三四頁。

- (9) この箇所も単行本収録時に加筆された。
- (10) 『春を待ちつ』(アルス、一二九五・三)収録時に加筆修正され、「イプセンの『人形の家』を讀みて」と改題された。
- (11) 小林一郎「八 島崎藤村変身の意義——作品『三人』を中心に——」(『島崎藤村研究』教育研究センター、一九八六・九)。
- (12) 『文部省 第四年版 明治九年度 第一冊』「明治九年府県小学校教員生徒及学齡人員表」の「学齡人員百中就学生徒比例」によれば、長野県は六三・二四%となっており、三八府県中首位となっていた。
- (13) 澤柳政太郎「我国の私立学校」(『退耕録』丙午出版社、一九〇九・四、一〇九頁)。
- (14) そうした学校の一つが、藤村の明治女学校で教え子・羽仁もと子が一九二二年に開いた自由学園であり、藤村は長女の柳子を当学園に入学させている。
- (15) 藤村も一九一七年五月一日の午後「最近仏国文学の印象」と題した講演を行なっている。ただし、主催自体は東西南北会ではなく、松本市と東筑摩の教育会共同の都市連合総集会(常集会)であり、会場には松本中学校講堂が使用された。
- (16) 無縫生「雪嶺三宅博士」(『信濃公論』第八三号、一九一〇・六・一)。同紙上では手塚は無縫生、天無縫、嶺間生の筆名を用いている。
- (17) 海野盛義によれば、玉川村(現在の茅野市)の玉川尋常高等小学校在職時の手塚は、小学校に哲学書は不要として村役場が代金を支払わなかったにもかかわらず、それらの本を積極的に自費で購入していたという(『玉川時代の手塚縫蔵先生』『信濃教育』(一〇二〇号、一九七四・一)。また、阿部次郎の著作への関心は、手塚の和田小学校在職時の校長であり、東西南北会の相談役でもあった太田貞一(水穂)の影響もあったと思われる。水穂は一九一五年に創刊した短歌雑誌『潮音』の誌上にはしばしば阿部らの文章を載せていた。
- (18) 小松進「信州教育を育ててきたもの 七十年の回顧 先輩に聞く 星校長排斥とその顛末」(『信濃教育』第八四号、一九五六・一二、六七頁)。
- (19) 松本市教育会百年誌編集委員会「編」『第五章 大正時代の教育会』(『松本市教育会百年誌』松本市教育会、一九八四・一一)を参照。なお、藤村は赤羽に乞われて『小さい花』にも童話を何度か掲載(既発表作を転載)している(赤羽王郎「わたしの歩いた道」信濃教育会出版部、一九八二・六)。信州の白樺派や自由西教育運動はそれぞれ別にあつたが、既存の教育に対する反発として同時多発的に隆盛した。
- (20) LYLの活動については長野県下伊那郡青年団史編纂委員会「編」『下伊那青年運動史 長野県下伊那郡青年団の五十年』(国土社、一九六〇・七)に詳しい。
- (21) 和崎光太郎「大正自由教育と『赤化思想』——川井訓導事件とその周辺——」(『信濃』第五九巻第一〇号、二〇〇七・一〇、七六一頁)。
- (22) 久保田俊彦「女及び女教員」(『信濃教育』第三七四号、一九一七・一二、三頁)。
- (23) 新田義之「第四章 東北・京都帝国大学総長時代」(『澤柳政太郎 随時随所二葉シ

マザルナシ』ミネルヴァ書房、二〇〇六・六)。

- (24) 帝国教育会の前会長・辻新次は澤柳と同じ松本出身であり、澤柳が入省した当時の文部次官であつた。そのような縁から辻は澤柳に目をかけており、同会にも一八九九年から理事として引き入れていたが、一九一五年に辻が亡くなったため、その役職を継ぐ格好となつた。
- (25) 澤柳政太郎「小学校の女教員」、本会調査委員「女教員問題に関する調査」及び「小学校男女教員の割合に関する諸家の意見」(『帝国教育』第四〇九号、一九一六・八)。
- (26) 前掲注(19)、三八〇頁。
- (27) 他方、桃子が「わたしも、東京から松本へ来る時には、どんなに瓜生さんを頼りにして来ましたらう」と言うように、得子は桃子よりも先に松本で教員生活を始めていた。
- (28) 信濃毎日新聞社編集局報道部「編」『大正五 白樺運動と「地上」創刊』(『信州の百年』信濃毎日新聞社、一九六七・一二)。
- (29) 一九二三年一月一日、当時の山本権兵衛内閣総理大臣は大正天皇から「国民精神作興ニ関スル詔書」を拝命した。そこでは震災後の世相の「軽佻詭激ノ風」が厳しく諫められ、国民は「先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ」「国家ノ興隆ト民族ノ安栄社会ノ福祉トヲ図」るよう呼びかけられた。言うまでもなく、この詔書のメッセージは修身を説くことの強力な根拠足りえた。
- (30) 小山静子「第五章 修身教科書にみる良妻賢母像の変遷」(『良妻賢母という規範』勁草書房、一九九一・一〇)。
- (31) 姜華「大正デモクラシー期の修身教科書に見る良妻賢母教育——井上哲次郎編『女子修身教科書』を中心にして——」(『東アジア文化研究』第一九号、二〇一二・六、一一頁)。また、井上の男女の性別分業による家庭の安定という視点は同時期に書かれた国民道徳論とも一致していた(附録 第三 婦人問題の過去現在及び将来)『我が国体と国民道徳』廣文堂書店、一九二五・九)。
- (32) 姜華「大正デモクラシー期の修身教科書に見る良妻賢母教育の変容——沢柳政太郎編『改訂女子修身訓』の分析を中心にして——」(『東アジア文化研究』第二〇号、二〇一三・六、七九頁)。
- (33) 本間久雄「第四篇 婦人と当来の文化 第一章 高等女学校修身教科書を批評してその改善を促す」(『増補 現代の婦人問題』天祐社、一九三三・八、三三三頁)。本論は注(31)、(32)で姜華の分析した修身教科書よりも早く発表されているが、良妻賢母論が連綿と続く問題である以上、本間の批判はその後の修身教科書にも当て嵌まる。
- (34) 阿部次郎「一 人生批評の原理としての人格主義的見地」(『人格主義』岩波書店、一九二二・六、五六頁)。また、竹内洋はケールルの「教養主義」を「人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」とし、「教養主義文化の伝達者」の代表

- に阿部次郎、和辻哲郎を挙げている(「エリート学生文化のうねり」『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中公新書、二〇〇三・七、三九―四〇頁)。
- (35) 和辻哲郎は一九二二年五月一七日に「文化哲学史観」、安倍能成は同年八月一七日から一九日にかけて「ヴィンデルバンド氏一九世紀独逸思想史」と題した講習会を行なっている(前掲注(19)、三九三頁)。
- (36) もっとも、桃子のモデル・伊吹信子については一九二二年に和辻哲郎と結婚した高瀬照と学生時代の友人であり、早くから和辻の著作を手にとっていた可能性はある。伊吹は後年に二人の家に寄寓し、和辻の原稿を手伝うほど家族ぐるみの付き合いがあった(伊吹信子「思ひ出すことども」和辻照「編」『和辻哲郎の思ひ出』岩波書店、一九六七・六)。
- (37) 相田隆太郎「本年の評論界——文芸評論の左傾——」(『新潮』第三七卷第六号、一九二二・一二、九一頁 ※傍点原題)。
- (38) 拙論「島崎藤村『涙』とその問題系 掲載誌『解放』の論調との交差」では、「涙」(『解放』第二卷第六号、一九二〇・六)というテクストを「夫一妻制の婚姻制度に起因する正妻(後家)と妾の対立と和解の問題として捉えた(『社会文学』第五一号、二〇二〇・三)。
- (39) 一九二四年四月二一日付・加藤静子宛書簡、五月二四日付・中根駒之助宛書簡はそれぞれ『藤村全集 第一七卷』(筑摩書房、一九六八・一一)の三二九頁、三三三頁に収録されている。この加藤宛書簡で藤村は涙を流す得子の場面についても書き足す意欲を述べていたが、その部分は手が付けられなかった。一方、具体的な修正案は示されていないものの、加藤は一九二四年四月一日の藤村宛書簡で桃子の描写が物足りないことを指摘しており、桃子に関する加筆は直接的にはこの助言を受け入れたものと考えられる(加藤静子「編」『藤村妻への手紙』岩波書店、一九六八・六、一三―一四頁)。これによって結果的にもともと桃子に比べて実子と距離があった得子の描写が改稿によってより後景化した。
- (40) 永瀬朋枝は、一九二〇年代に既に評価を得た作家たちによって「大正文壇」という機制が形成されつつあったのに対し、藤村の周囲にいた青年たちが「機会均等」を主張したことで、「女性や地方在住者や社会的階層の高くない作家志望者達」の存在が浮かび上がってくる」と述べた(第一章 小説家協会・無名作家同盟から見る大正文壇)『無名作家から見る日本近代文学 島崎藤村と『処女地』の女性達』(和泉書院、二〇二〇・三、三四頁)。また、永瀬は同書にて追跡した『処女地』同人たちの創作活動を、そうした流れのなかに位置付けているが、創作を志していたのではないものの、「三人」の実子と桃子、得子のすれ違いもまた男性／女性、都市／地方といった複合的な分断の問題を織り込んでいた。
- (41) テクストでは桃子に隠れがちな得子だが、モデルとなった百瀬は江が結婚した西尾実(川井訓導事件に際して県当局を批判した川井擁護派の先陣に立ったこと)で知られている。

A Discourse on Tōson Shimazaki's *Sannin*  
 —— Matsumoto, the College Town, and the Education of Women ——

Yutaka KURIHARA

Abstract

Tōson Shimazaki's novel, *Sannin*, published in the magazine *Kaizō* in April 1924, tells the story of Tokyo resident Saneko Matsuo. She visits two former schoolmates, Momoko Nakagawa and Tokuko Uryu, who are teaching at a girls' school in Matsumoto. While spending time together at a hot spring inn, Saneko comes to the realization of their mutual inability to see eye to eye. The novel had been fairly well-received at the time of publication, but drew criticism for its concrete depiction of the main protagonist Saneko, in contrast with its vague portrayal of the inner world of Momoko and Tokuko despite the title *Sannin* (meaning "three people"). Moreover, after it was made public that Saneko had been modelled after Shizuko Kato, who married Tōson four years after the publication of *Sannin*, the novel was alluded to only as an extension of discussions concerning the romantic relationship between the two, leaving extremely few opportunities to consider the text itself.

In light of that, this paper focuses on the opposing views on education in Matsumoto in the era when *Sannin* was written. Liberal education that valued students' individuality had flourished in Nagano Prefecture around the 1910s to 1920s, particularly in Matsumoto. However, there were aspects of liberal education that contradicted with existing national morals, so conflict with the national/prefectural educational policy began to surface. Consequently, teachers who were for liberal education became linked with radical social thought, and were banished from the education sector. In contrast, moral education subjects that upheld conservative views of men and women were valued once again.

This paper sheds light on the critical nature of the social thought presented in *Sannin*, which has been overlooked in reviews of the novel to date. This is positioned within the contentious notions of education in Matsumoto, as depicted by the indecision demonstrated by Momoko and Tokuko—whom Saneko used to regard as excellent students—on whether or not to continue teaching. At the same time, this paper attempts to highlight the male reader's gaze, which unconsciously takes the premise of "Center = Tokyo's literary circles" for this text.